

業 務 報 告

昭 和 57 年 度



No. 15

神奈川県林業試験場

ま え が き

緑は万物生命のよりどころであり、食物連鎖の原点として、有史以来、その恩恵の深さは、私達人類の世代と認識をはるかに超えるものがあります。

最近、特に資源の保護利用と社会環境の相克が進展する中で、緑の本質に関する論議とこれに伴う理解が次第に広く一般に浸透しつつありますことは、まさに新しい緑の時代の到来とうけとめることができます。

この絶好の機会に森林、林業と人間生活との深いかかわりあいを正しく理解させるための努力は、私達林業に携わるものに課せられた責務であることを痛感し、より質の高い緑の維持造成とこれが健全な利用をはかるための技術的な手法の究明開発は当面の緊要な課題であることを深く自覚せねばなりません。

緑の形態と機能をそなえている植生群のうち、その代表格であり最も高度な位置づけがなされている森林の重要性とさまざまな効用について、総合的な観点から更に新たな認識が求められるとともに、それぞれの地域の特性に応じ、長期の生産過程そのものに着目した施業技術体系、たとえば複層林施業技術の確立といったような新分野の開拓に余念なき精進が要請されるものであります。

当场における昭和57年度の試験研究は、針葉樹人工複層林施業技術の研究ほか1件の新規課題を含め、13課題、16項目（うち共同研究2項目）について実施したもので、この報告書は、以上の試験研究をはじめ、普及指導および林木育種その他の関連業務等、その概要をとりまとめたものであります。各位の御参考になれば幸いと存じます。

昭和58年6月

神奈川県林業試験場長 大 島 照 治

目 次

研 究 業 務

造 林 部 門

I 林 木 育 種

- 1 林木育種に関する研究 7

II 育 苗

- 1 育苗に関する研究 8

III 育 林

- 1 保育技術の実態調査 10

- 2 針葉樹人工複層林施業技術の研究 11

IV 立 地

- 1 森林の生産力調査 12

- 2 林地に対する汚泥利用試験（共同研究） 13

V 広 葉 樹

- 1 有用広葉樹の利用開発に関する研究 14

特 産 部 門

VI キ ノ コ

- 1 シイタケ栽培における害菌防除試験 15

- 2 シイタケ優良ほだ木造成試験 17

- 3 シイタケ菌糸のクヌギ原木に対する活着向上のための基礎調査 17

- 4 野生キノコの栽培化試験 18

保 護 部 門

VII 樹 病

- 1 森林病害実態調査 19

- 2 ヒノキのならたけ病防除に関する試験 20

VIII 昆 虫

- 1 スギ採種穂園の虫害調査 22

環境緑化部門

Ⅸ 海岸緑化

- 1 湘南海岸地域における樹木育成に関する研究 23

X 山地緑化

- 1 法面緑化に関する試験 24

XI 環境評価

- 1 自生植物及び帰化植物による評価（共同研究） 26

関連業務

- I 林木育種事業 29

II 見本園管理事業

- 1 ク リ 32
- 2 タケ・ササ 32
- 3 モウソウチク林 34
- 4 街 路 樹 34
- 5 生 垣 35
- 6 樹 木 35

普及指導業務

- I 林業普及指導業務 39

一般業務

- I 概 要 45
- II 職員配置表 46
- III 予算及び決算 47
- IV 主な行事一覧 50

気象観測

- I 昭和57年気象観測集計表 55
- II 昭和57年月別風向頻度図 56

研 究 業 務

I 林 木 育 種

1 林木育種に関する研究

星 山 豊 房

1) 自殖交配試験

I 目 的

各ローンの稔性について調べるとともに劣性遺伝子の発現を確認し、優良種子生産の資料とする。

II 方 法

スギ採種園の一部に対し、昭和57年6月下旬及び8月上旬の2回、ジベレリンの50 ppm溶液を葉面散布し、昭和58年1月に隔離用交配袋をかけた。

クローン数：30クローン

供 試 数：30×7=210枝

交 配 法：雌雄同一袋内とし、数日おきに袋を振って自殖交配させた。なお、一袋に納める雌雄花の数は、クローンによって極端に異なるため、均一にできなかった。

III 結 果

一部には、受精していない雌花もまれにあった。

なおこれらの球果は昭和58年に採取した段階で種子を分離し、ソフテックスによる種子の充実度調査、播種試験等新たな試験を実施する。

表1 自殖させたクローン名

クローン名	使用個体数	クローン名	使用個体数
三 浦 1号	1	津久井 3号	2
中 2号	1	三 保 2号	1
" 3号	1	" 4号	1
" 4号	1	丹 沢 1号	1
" 6号	0	" 4号	1
" 11号	1	" 6号	1
" 12号	1	" 8号	1
足柄上 2号	1	" 10号	1
足柄下 6号	4	箱 根 2号	1
" 7号	1	" 4号	2
" 8号	1	久 野 1号	1
" 9号	2	片 野 1号	1
愛 甲 2号	1	" 3号	3
津久井 1号	1	" 6号	1
" 2号	1	与 瀬 3号	1

Ⅱ 育 苗

1. 育苗に関する研究

赤 岩 興 一

A 精英樹種子育苗試験

I 目 的

当場採種園産スギ種苗の系統別生育特性を把握するとともに、育苗方法について検討する。

Ⅱ 方 法

1. 調査方法

試験用苗畑で育成した、丹沢4号、中3号、箱根3号、足柄下8号、久野1号、三浦1号のスギ系統別実生2年生苗および1/5000aのワグナーポットにバーミキュライトをつめ、育成した、与瀬3号、中9号、足柄下9号、久野2号、三浦1号、丹沢5号、片浦1号、津久井3号、中4号のスギ系統別実生1年生苗について生長量および形質を調査し、比較した。

2. 調査項目

1) 生長量調査

幹の上長生長(cm)、根元直径生長(mm)、根の伸長生長(cm)、葉の重量生長(g)、幹の重量生長(g)、根の重量生長(g)

2) 形質調査

比較苗高(苗長cm/根元直径mm)、T・R率(地上部重量g/地下部重量g)、弱さ度(苗長cm/地上部風乾重量g)

Ⅲ 結 果

1. 試験用苗畑で育成した系統苗について生長量および形質を調査し、比較した結果は次のとおりである。

1) 幹の上長生長は丹沢4号、箱根3号が大きく、根元直径生長、根の伸長生長は丹沢4号、箱根3号、中3号が大きかった。

2) 葉の重量生長は丹沢4号、中3号が大きく、幹、根の重量生長は丹沢4号、中3号、箱根3号が大きかった。

3) 比較苗高の小さい、根元直径が太くしっかりしたものとして、中3号、丹沢4号、久野1号があげられ、T・R率の小さい、根の発達程度の大きいものとして、丹沢4号、箱根3号、足柄下8号があげられる。

また、弱さ度の小さい、苗木の充実したものとして、中3号、丹沢4号、久野1号があげられる。

2. ポットで育成した系統苗について生長量および形質を調査し、比較した結果は次のとおりである。

1) 幹の上長生長は与瀬3号、片浦1号が大きく、根元直径生長は与瀬3号、中9号、片浦1号、足柄下9号が大きかった。

- また、根の伸長生長は足柄下9号、与瀬3号、丹沢5号、津久井3号が大きかった。
- 2) 葉の重量生長は与瀬3号、中9号、片浦1号が大きく、幹の重量生長は与瀬3号、中9号、片浦1号、三浦1号が大きかった。

また、根の重量生長は与瀬3号、津久井3号が大きかった。

- 3) 比較苗高の小さい、根元直径が太くしっかりしたものとして、丹沢5号、中9号、津久井3号があげられ、T・R率の小さい、根の発達程度の大きいものとして、津久井3号、三浦1号があげられる。

また、弱さ度の小さい、苗木の充実したものとして、中9号、与瀬3号があげられる。

表1 スギ系統苗の生長量および形質の比較(苗畑育成苗)

系 統 名	生 長 量						形 質		
	幹 上生長	根 元直径生長	根 伸長生長	葉 重量生長	幹 重量生長	根 重量生長	比 較 高	T・R率	弱さ度
中 3 号	20.5 ^{cm}	5.1 ^{mm}	31.5 ^{cm}	5106 ^g	1417 ^g	2261 ^g	4.0	2.9	3.1
	20.0~21.0	4.9~5.4	26.0~35.0	4579~5641	1136~1591	1765~2703			
丹 沢 4 号	23.3	5.4	23.2	5811	1566	3618	4.3	2.0	3.2
	18.5~28.2	5.1~5.8	21.4~27.5	4301~7067	1157~1960	3048~5223			
久 野 1 号	17.2	4.3	20.6	4090	0852	1577	4.0	3.1	3.5
	15.5~18.5	3.9~5.4	12.7~27.7	2918~6077	0634~1.281	0948~2.215			
箱 根 3 号	22.8	4.8	26.8	3876	1179	2167	4.8	2.3	4.5
	21.5~24.5	4.6~5.1	25.5~29.0	3400~4183	1002~1.271	1905~2562			
足柄下8号	20.6	3.6	22.6	1961	0498	1405	5.7	1.8	8.4
	13.5~33.8	3.3~4.2	22.0~23.5	1617~2570	0422~0.599	1002~1.947			
三 浦 1 号	17.1	3.4	22.2	2035	0735	1263	5.0	2.2	6.2
	16.0~17.7	3.2~3.7	19.5~26.0	1843~2322	0707~0.786	0941~1529			

表2 スギ系統苗の生長量および形質の比較(ポット育成苗)

系 統 名	生 長 量						形 質		
	幹 上生長	根 元直径生長	根 伸長生長	葉 重量生長	幹 重量生長	根 重量生長	比 較 高	T・R率	弱さ度
三 浦 1 号	23.7 ^{cm}	3.5 ^{mm}	27.1 ^{cm}	1196 ^g	0692 ^g	0874 ^g	6.8	2.2	12.6
	15.0~31.0	2.4~4.4	21.0~31.5	0485~2.279	0442~0.960	0550~1.506			
与 瀬 3 号	31.5	4.6	32.5	2723	0988	1564	6.9	2.4	8.5
	29.0~33.5	3.8~5.6	28.7~38.0	1946~4512	0820~1.308	1193~2.311			
中 9 号	24.6	3.9	29.4	2279	0739	0845	6.3	3.6	8.2
	21.0~32.0	3.6~4.7	20.0~36.5	1147~4249	0486~1.137	0323~1.647			
足柄下9号	24.9	3.7	32.7	1524	0628	0832	6.7	2.6	11.6
	22.0~26.5	3.5~4.0	27.0~37.7	1097~1816	0558~0.681	0526~1.037			
久 野 2 号	23.1	3.4	27.5	1399	0566	0802	6.8	2.5	11.8
	20.5~27.0	2.1~3.8	9.7~31.5	1.029~1.912	0.475~0.640	0.589~1.095			
丹 沢 5 号	20.8	3.3	31.1	0956	0434	0585	4.6	2.4	10.8
	18.0~23.0	2.6~4.3	23.0~38.0	0306~2.120	0244~0.700	0201~1.129			
片 浦 1 号	26.5	3.7	28.4	1931	0676	0825	7.2	3.2	10.2
	23.0~29.0	3.4~4.3	22.0~35.0	1037~2543	0476~0.798	0649~1.069			
津久井3号	20.6	3.2	30.7	1229	0611	1040	6.4	1.8	11.2
	17.0~25.0	2.8~3.5	24.2~38.0	0749~2.003	0370~0.716	0759~1.688			
中 4 号	24.0	3.3	26.0	1161	0553	0739	7.3	2.3	14.0
	20.5~27.5	2.6~4.0	21.0~32.5	0703~1.957	0435~0.784	0429~1.191			

Ⅲ 育 林

1. 保育技術の実態調査

越地 正・鈴木 清

I 目 的

間伐、枝打ち等要保育林分が増加しているが、また一方では保育の遅れによる過密林分等の不良林分も多くみられるようになった。本調査は、県内で行われている保育の実態を把握し、保育技術上の問題点を検討することにより、地域にあったより適正な保育技術を確立していくための基礎資料を得る。

Ⅱ 方 法

1. 対象林分 15年生以上のスギ林を対象に林齢や地域を考慮して任意に選定する。
2. 生長調査 プロットの大きさ約5a内の毎木調査および樹型級区分
3. 間伐、枝打ち等保育状況の調査

Ⅲ 結 果

本年度は、県西部地域を対象に、表1の8箇所について調査を行った。その結果、立木本数が密な林分は曲り木や被害木など形質不良木が多く含まれる傾向にあった。しかし、No.8林分のように密な林分でも枝打ちなど保育作業をしている林分は形質不良木が少なかった。No.3林分は、台風により被害を受けたもので、前年間伐した影響も考えられるが、風害を受けやすい地形条件も想定されるので今後調査事例をふやしていく必要がある。

表1 調 査 地 一 覧 表

調査 番号	調 査 地	林 齢	平均樹高	平均胸高 直 径	ha 当 り 立木本数	形質不良 木の割合	林分密度	手入れの状況等
1	山北町玄倉 (県有林25林班)	67年	26m	36.8cm	496本	6%	中	間伐実行 (昭56年)
2	同 上	70	28	42.4	432	4	中	間伐実行 (昭56年)
3	山北町幽神	20	(10)	14.8	1,733	70 (風倒木)	中	間伐、枝打ち後 風害を受ける (昭57年被害)
4	山北町玄倉	30	16	19.7	2,100	30	密	下層植生なし
5	山北町箒沢	38	23	29.5	1,125	27	密	同 上
6	山北町箒沢	17	16	18.3	2,133	31	密	同 上
7	南足柄市地藏堂	19	13	12.7	3,511	44	極密	手入れほとんど していない
8	南足柄市矢倉沢	27	14	14.8	2,844	8	密	枝打ち6m高さま で行う (昭55年実施)

()は推定値

2 針葉樹人工複層林施業技術の研究

— 二段林施業地の追跡調査 —

鈴木 清・越地 正

I 目 的

二段林施業地の成育状況を調べ、人工複層林施業のための資料とする。

II 方 法

1. 場 所 足柄下郡箱根町宮城野 県有林地内
2. 項 目 ① 下木の成育状況 ② 上木に対する下木の成長関係

III 結 果

箱根県有林13林班におけるスギ、ヒノキ60年生を上木とするヒノキ8年生の成育状況は、図1のようであった。これは天城地方ヒノキ収穫表の地位Ⅰに相当しており、良好な成育を示している。

また、同県有林14林班におけるケヤキ約50年生を上木とするヒノキ23年生の二段林について、ケヤキの樹冠と下木の成長の関係を調べた結果は、図2のようであった。これによると、上木のケヤキの樹冠範囲内にあるヒノキは、ケヤキの根元に近いほど樹高が低い傾向がみられ、上木の影響を強くうけていることが伺われる。

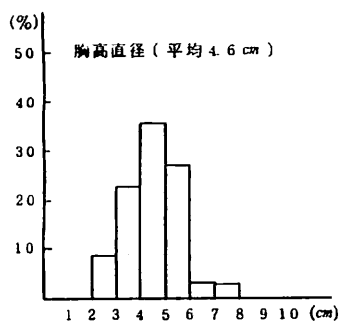
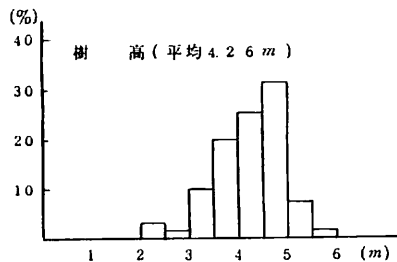


図1 ヒノキ8年生下水の樹高および胸高直径の度数分布 (調査本数79本)

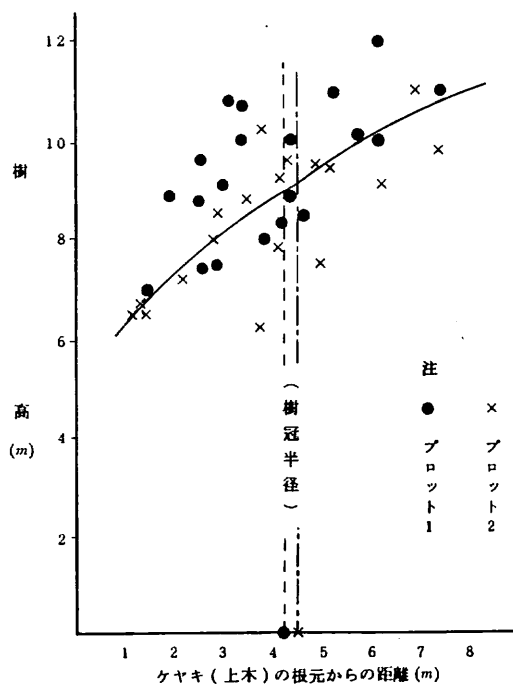


図2 ケヤキ(上木)に対するヒノキ(下木)の成長関係

Ⅳ 立 地

1 森林の生産力調査

越 地 正

I 目 的

森林の立地条件に応じた林地の生産力を把握することにより、林地の高度利用や地力維持など適正な森林管理をしていくうえでの基礎資料を得る。

Ⅱ 方 法

県内のスギ林を対象に成長調査（ポイント・サンプリング法）、および、代表林分で樹幹解析による調査を行い、土壌等立地条件の違いによる地位指数を判定する。

Ⅲ 結 果

本年度は、山北町を中心に調査を実施した。

代表林分における樹幹解析は、山北町玄倉で行った。この林分の土壌は、B D型で土層が深く生産力が高いと考えられた。しかし、調査木の成育は、図1のように20年生前後の成長は非常に良好であるが、その後の成長はおちるようで、前年調査した秦野市寺山（諸戸山林）の場合と同様、40年生の地位指数は16で地位の低い所に位置している。

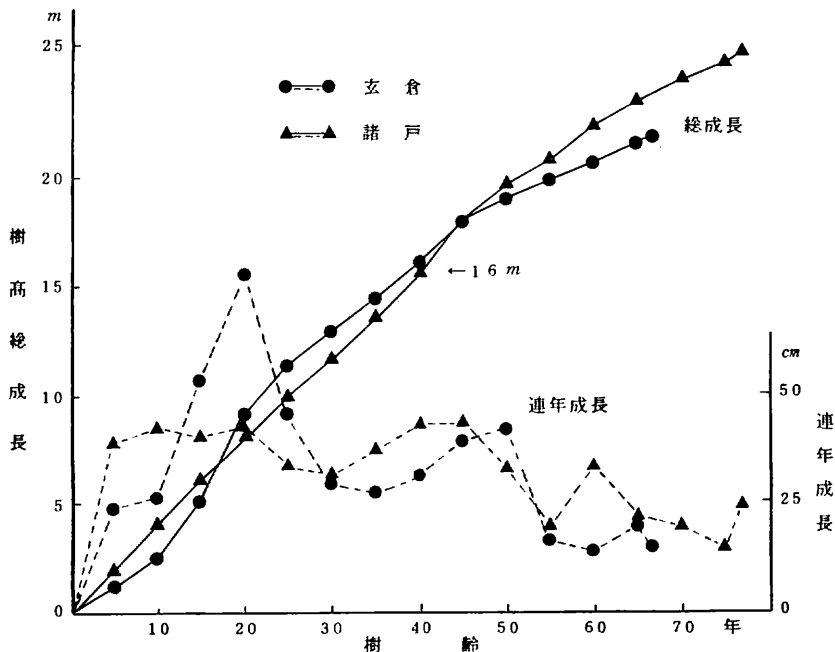


図 1 樹 高 成 長 曲 線

2 林地に対する汚泥利用試験（共同研究）

越地 正・鈴木 清

I 目 的

下水処理汚泥を林地に還元利用する一環として、湘南海岸砂地土壤に対して下水汚泥を施用した場合のクロマツ等の樹木や砂地土壤に及ぼす影響について検討する。

なお、本試験は「畑地、林地における浄化機能および水田の環境保全機能の研究」の分担項目として、県内の試験研究機関と共同で実施している。

II 方 法

1. 実施場所 茅ヶ崎市柳島 湘南海岸砂防林地内

2. 試験方法

3年生のクロマツおよびマサキ、トベラの植栽地に相模川流域下水道左岸終末処理場の脱水汚泥を施用した。また、同脱水汚泥にクロマツ等の剪定くずのチップ化したものを混合し、堆肥化したコンポストもあわせて供試した。試験区は、対照区、下水汚泥 $5\text{ m}^3/a$ 区、下水汚泥 $10\text{ m}^3/a$ 区、コンポスト $5\text{ m}^3/a$ 区の4区とした。試験区の大きさは、1区画 100 m^2 である。下水汚泥の施用は、昭和56年3月に、土壤の表面にマルチする方法で行った。

III 結 果

クロマツの成長は、表1のように下水汚泥 $5\text{ m}^3/a$ 区で成長が良くなる傾向が認められた。コンポスト $5\text{ m}^3/a$ 区は、施用後2年目にやや良い成長を示すようであったが、下水汚泥 $10\text{ m}^3/a$ 区は、対照区とほとんど変わらない成長経過を示した。マサキおよびトベラの成長は、バラツキが大きかったが、ほぼクロマツと同様の傾向を示すようであった。

土壤への影響は、下水汚泥の施用により置換性石灰の増大、置換性苦土の減少が認められた。また、コンポストの施用により酸性が強くなる傾向がみられた。

表 1 クロマツの成長

処 理 区	1年間の上長成長 (cm)				肥大成長 (根元径cm)	
	2 年 前 (S54)	1 年 前 (S55)	施 用 年 (S56)	2 年 目 (S57)	施 用 年 (S56)	2 年 目 (S57)
対 象 区	5.7	3.5	4.2	5.0	2.6	4.1
下 水 汚 泥 $5\text{ m}^3/a$ 区	4.7	4.0	4.6	5.6	2.6	4.4
下 水 汚 泥 $10\text{ m}^3/a$ 区	4.5	4.0	4.0	5.1	2.5	3.9
コンポスト $5\text{ m}^3/a$ 区	4.8	4.0	4.1	5.4	2.6	4.2

V 広 葉 樹

1 有用広葉樹の利用開発に関する研究

中 川 重 年

I 目 的

工芸材、薬用原料、しいたけ原木など広葉樹の利用開発が強く望まれている。そこで県下の有用広葉樹の特性および育苗、育林技術を究明し、有用材の生産をはじめ環境緑化に資する。

II 方 法

育林試験およびこれまでに行われた広葉樹造林の成績調査を行う。さらに野生樹木の資料収集を行う。試験、調査、収集項目は次のとおり。

1. 育 林 試 験 当場内にミズキ、キハダ各50本、清川村札掛にケヤキ、キハダ、ミズキ各100本植栽。
2. 広葉樹造林の基礎調査 愛甲郡愛川町田代地内にあるミズキ自然成立林の調査を行う。
3. 広葉樹材資料収集 広葉樹材の採取を行う。
4. 野生樹木方言調査 横浜市内4ヶ所で方言調査を行う。

III 結 果

1. 育 林 試 験 現在調査中である。
2. 広葉樹造林地成績調査 結果は第34回日本林学会関東支部大会および神奈川県林業試験場研究報告第9号に発表した。
3. 広葉樹材資料収集 ケヤキ、オニグルミ等9種を収集。
4. 野生樹木方言調査 神奈川県林業試験場研究報告第9号に発表した。

Ⅵ キ ノ コ

1 シイタケ栽培における害菌防除試験

木 内 信 行

I 目 的

シイタケ栽培のうえで問題となる害菌の生理生態を究明し、生態的防除法を確立する。

Ⅱ 方 法

1. 試験用ほだ場 当场人工ほだ場
2. 試験設計 表1のとおりである。

表1 試 験 区

試 験 区	封ロ-の有無	天地返し回数	接種本数	伐採時期	玉切り時期	接種時期
A - 0	有	0	20	2月中旬	2月中旬	3月30・ 31日
A - 2		2	40			
A - 5		5	43			
B - 0	無	0	7			
B - 2		2	20			
B - 5		5	20			

3. 原 木

- (1) 樹 種 コナラ（津久井郡相模湖町産）
- (2) 寸 法 長さ90cm×末口径6～18cm
- (3) 種 菌 中高温性菌
- (4) 接種駒数 1本当たり平均20個
- (5) 仮伏せ方法 当场人工ほだ場で杉丸太を台に4～5段重ねとし、上をこもで覆う。

4. 管 理

本伏せ後の管理として、天地返しのかえり。

5. 調査項目

- (1) 害菌の発生状況 (2) 害菌間およびシイタケ菌との関係 (3) シイタケ菌の活着率と菌糸の伸展状況 (4) 子実体の発生量

Ⅲ 結 果

本年度は試験区を設定したのみで、今後上記の調査を行う。

A シイタケ栽培における害菌防除試験（昭和56年度実施）

目的・方法等は業務報告№14を参照。本年度は活着率・害菌発生状況および子実体発生量について調査したので報告する。

- (1) 活着率 表1のとおりである。

表 1 活 着 率

試 験 区	菌 系	ほだ木数	調査駒数	活 着 数	不活着数	活着率(%)
無 処 理	A	2 5	6 7	6 7	0	1 0 0
	B	2 5	5 6	5 6	0	1 0 0
	C	2 5	7 0	6 9	1	9 9
天地返し	A	2 5	7 0	7 0	0	1 0 0
	B	2 5	6 1	6 1	0	1 0 0
	C	2 5	6 5	6 5	0	1 0 0

- (2) 害菌発生状況 表2のとおりである。

表 2 害 菌 の 発 生 状 況

試 験 区	菌 系	害 菌 発 生 率 (%)			
		ヌルデタケ	ダイダイタケ	カワラタケ	トリコデルマ
無 処 理	A	2 4	0	0	4 8
	B	4 0	4	0	1 6
	C	2 4	8	0	2 8
天地返し	A	2 4	4	0	2 8
	B	3 6	1 6	4	4 4
	C	1 6	4	0	2 4

- (3) 子実体の発生量 表3のとおりである。

表 3 子 実 体 の 発 生 量

試 験 区	菌 系	子 実 体 発 生 量		
		個数(個/ m^2)	乾重(g/m^2)	1個当りの乾重量(g)
無 処 理	A	1 4	5 3	3.7
	B	2 4 0	8 1 7	3.4
	C	8 5	4 0 8	4.8
天地返し	A	7	3 3	4.5
	B	8 8	3 0 6	3.5
	C	1 6 5	4 7 2	2.9

B シイタケ栽培における害菌防除試験(昭和55年度実施)

目的・方法等は業務報告No13を参照。本年度は子実体発生量を調査したので報告する。

試 験 区	子 実 体 発 生 量		
	個数(個/ m^2)	乾重(g/m^2)	1個当りの乾重量(g)
冬伐採・冬接種	2 0 0	4 5 3	2.3
冬伐採・春接種	9 8 5	3, 1 3 1	3.2
春伐採・春接種	6 1 6	1, 1 9 9	1.9

2 シイタケ優良ほだ木造成試験

木 内 信 行

- A 枝干し試験（昭和54年度実施）
 B 伐採後の処理別試験（昭和53年度実施）
 C 伐期別試験（昭和52年度実施）

それぞれの目的・方法については業務報告No.13を参照。本年度は子実体の発生量を調査したので報告する。

A

試 験 区	子 実 体 発 生 量		
	個数（個/ m^2 ）	乾重（ g/m^2 ）	1個当りの乾重量（ g ）
伐採直後接種区	394	1,644	4.2
1カ月枝干し後接種区	350	1,267	3.6
2カ月枝干し後接種区	536	1,826	3.4
春伐採直後接種区	463	1,083	2.3

B

試 験 区		子 実 体 発 生 量		
		個数（個/ m^2 ）	乾重（ g/m^2 ）	1個当りの乾重量（ g ）
秋伐採1カ月後 玉切り	直後接種区	639	2,164	3.4
	1カ月後接種区	557	1,759	3.2
秋伐採2カ月後 玉切り	直後接種区	448	1,077	2.4
	1カ月後接種区	499	2,144	4.3

C

試 験 区	子 実 体 発 生 量		
	個数（個/ m^2 ）	乾重（ g/m^2 ）	1個当りの乾重量（ g ）
秋期伐採直後接種区	441	1,048	2.4
秋期伐採葉干し後接種区	239	643	2.7
冬期伐採春期接種区	437	981	2.2
春期伐採直後接種区	756	1,525	2.0

3 シイタケ菌糸のクヌギ原木に対する活着向上のための基礎調査

木 内 信 行

本試験は昭和52年度に共同試験（関中ブロック）として行ったもので、昨年度に引き続き子実体の発生量を調査したので報告する。なお、目的・方法については業務報告No.13を参照。

試 験 区	子 実 体 発 生 量		
	個数（個/ m^2 ）	乾重（ g/m^2 ）	1個当りの乾重量（ g ）
秋期伐採直後接種区	71	200	2.8
秋期伐採枝干し後接種区	699	1,007	1.4
春期伐採直後接種区	690	1,441	2.1

4 野生キノコの栽培化試験

木 内 信 行

I 目 的

県内に発生する野生キノコのなかで、将来有望と思われるものを選びその栽培法を開発する。今年度はハタケシメジの培地および子実体の発生操作等を検討し、栽培化のための基礎資料を得る。

II 方 法

1. 供試菌 当场保存の菌株LD-Nを使用。
2. 供試培地および添加物 表1のとおりである。

表1 培 地 の 組 成

試 験 区	ヒラタケ培養残渣(ℓ)			モミガラ (ℓ)	ミミズ糞 (ℓ)	米ヌカ (ℓ)
	無 篩	細 粒	粗 粒			
1	1.5					0.3
2	1.5			0.3		0.3
3		1.5				0.3
4			1.5			0.3
5			1.5		0.2	0.3

3. 培養方法 表1の培地を200ml容の三角フラスコに150ml均一に詰め、20分間高圧滅菌し、あらかじめ鋸屑培地(残渣)で培養した菌糸塊約5mlを接種して25℃の恒温器内で培養した。

III 結 果

1. 培地全体に菌糸がまん延した日数は表2のとおりであった。

表2 菌糸のまん延日数

菌糸のまん延日数	試 験 区				
	1	2	3	4	5
日 数	4 0	4 1	4 1	3 7	3 4

2. 子実体の発生操作別の結果は表3のとおりであった。

表3 処理別の発生程度

温度処理(℃)	菌かきの有無	(菌かき後の)培養温度(℃)	子実体の発生
5	無	5	—
		15	—
		20	—
		25	—
10	無	15	—
		20	—
	有	15	+
		20	—
無	無	15	—
		20	—
		25	—
	有	15	+
		20	+
		25	—

Ⅶ 樹 病

1 森林病害実態調査

大 野 啓一郎

I 目 的

スギ、ヒノキ造林地で、発生する枝枯性病害等の被害実態を調査するとともに病原菌を同定する。

Ⅱ 方 法

1. 被害調査

1) 調査林分 湘南、足柄上地域のスギ、ヒノキ枝枯性病害発生林分

2) 調査方法 被害および発生環境を調査する。

2. 病原菌の同定

被害枝を採取し、実体鏡による観察と徒手切片により得られた資料を検鏡する。

Ⅲ 結 果

湘南、足柄上両地域で、スギ、ヒノキの枝枯性病害を主として調査を行った結果、スギではスギ黒点枝枯病とスギこぶ病が発生していたが、ヒノキの病害は認められなかった。当地域の枝枯病の多くはスギ黒点枝枯病であり、その被害状況は表1に示すとおりであった。当地域における本病の被害は伊勢原市と山北町の一部をのぞけば、比較的軽微であった。

表1 スギ黒点枝枯病の被害と発生環境

調査番号	調 査 地	調査 本数	病害 本数	被害 率	被 害 程 度			面積	林齢	方位 傾斜	斜 面 の 形 状	備 考
					微害	中害	激害					
82-1	伊勢原市寒沢	28	10	36%	80%	10%	10%	0.2	21	SE 35°	上昇斜面	
2	" "	42	31	74	81	19	—	0.2	35	N 28°	"	スギこぶ病 微害、沢筋
3	秦野市ヤビツ	32	14	44	86	14	0	0.5	21	S 21°	平衡斜面	
4	" "	38	10	26	100	0	0	0.4	20	NE 16°	下降斜面	
5	大磯町黒岩	24	6	25	100	0	0	0.3	25	W 41°	上昇斜面	
6	中井町藤沢	24	11	46	82	18	0	0.05	15	W 38°	"	
7	南足柄市猿山	34	12	35	50	42	8	0.15	5	N 33°	"	
8	山北町人遠	22	10	46	50	20	30	0.03	7	E 36°	"	
9	" 八丁	30	16	53	56	44	0	0.3	40	N 32°	平衡斜面	
10	" "	36	30	83	53	47	0	0.03	8	—	平 担	
11	" 焼津	31	10	32	100	0	0	1.5	20	E 33°	上昇斜面	
12	" 箒沢	42	21	50	81	19	0	0.5	17	NW 26°	下降斜面	スギ薄腐病 微害

2 ならたけ病防除に関する試験

大 野 啓一朗

I 目 的

ヒノキ造林木を加害するならたけ病を究明し、防除技術を確立する。

本年度は本病菌の分離および培養試験を行った。また人工接種と薬剤防除についても予備試験を行った。

II 方 法

1. 本病菌の分離

ナラタケ子実体から組織分離法により、本病菌の分離を行った。

2. 鋸屑培地における菌糸の生育試験

1) 試験区

スギ、ヒノキ、クロマツ、サクラ（ソメイヨシノ）、ポプラの計5樹種。各樹種、鋸屑入り中型試験管4本。

2) 供試材

各樹種の細枝（直径5～8mm）を約10mmに切断し、粉砕機で粉砕し、フルイ（メッシュN0.65）で微細粉を除去したものを鋸屑として供試した。

3) 供試菌

Am・T菌株（厚木市中荻野地内、子実体からの分離菌）を用い、接種片を均一とするため、酵母2%寒天平板培地で、25℃、5週間培養後の菌そうを直径5mmのコルクボーラーで、ぬいて接種片とした。

4) 方 法

中型試験管（内径22mm、長さ20cm）1本当たり、鋸屑10gと水道水18.6ccを加えて高圧殺菌し、冷却後に接種し、25℃で培養した。

5) 調 査

接種後1～5週間の菌糸の生育状況を調査した。

3. 人工接種試験

1) 試 験 場 所

当场隔離圃場

2) 接種年月日

昭和57年8月20日

3) 試 験 区

接種部位別に地表下5、10、20、30、40cm区と対照区計6区、2回くり返し。

4) 供 試 苗 木

ヒノキ4年生、1区（隔離ポット1m×1m）2本植。

5) 供 試 菌

接種菌株はAm・H菌株（秦野市羽根地内、子実体からの分離菌）で25℃50日間、鋸屑培養した菌塊を供試した。

6) 接 種 方 法

(1) 接種区

鋸屑種菌接種器を用いて一定量（約1.5cc）の菌そう塊を約200ccパーク堆肥の中央部におき、網袋に結めたものを所定の深さの根に添えた。

(2) 対照区

菌そう塊の入らないパーク堆肥入り網袋を用いたほかには地表下5cm接種区と同様であった。

7) 調 査

接種後に発病状況調査を行った。

4. 薬剤防除試験

1) 試験場所 当場内

2) 薬剤処理年月日 昭和57年10月5日

3) 処理区 3薬剤区と対照区、計4区、各区4ポット。

4) 供試苗木と供試菌

昭和57年6月9日に壤土を入れたワグナーポット(1/2000a)にヒノキ3年生苗木を1本ずつ植付け、昭和57年8月19日に人工接種と同様の供試菌の入った網袋を地表下10cmの根に添わせて埋め込んだ。

5) 供試薬剤と施用量

フジワン水和剤：1ポット当り1g(20g/m²)、ベンレート水和剤：1ポット当り0.5g(10g/m²) PCNB粉剤：1ポット当り1.5g(30g/m²)

6) 処理方法 薬剤処理区は各ポットに所定の施用量を散布し、表層土と混和した。

7) 調査 処理後に発病状況を調査した。

III 結果

1. 本病菌の分離

ナラタケ子実体から組織分離法により表1に示すように3菌株を分離した。

表1 分離菌株

分離年月日	子実体採取地	寄生樹種
昭和57年7月8日	足柄上郡中井町井の口	クスギ(伐株)
" 9月22日	津久井郡相模湖町千木良	ヒノキ(枯死木)
" 10月16日	平塚市南原	エノキ(伐株)

2. 鋸屑培地における菌糸の生育試験

5樹種の鋸屑培地における1～5週間後の菌糸の生育は図1に示すとおりであった。クロマツ鋸屑培地中におけるナラタケ菌糸の生育は不均一で、菌その多くは根状菌糸束であった。

3. 人工接種試験と薬剤防除試験

人工接種6ヶ月後と薬剤処理5ヶ月後に調査を行ったが、いずれの区においても発病を認めることはできず、両試験の結果は不明である。両試験区の発病状況調査は続行する予定である。

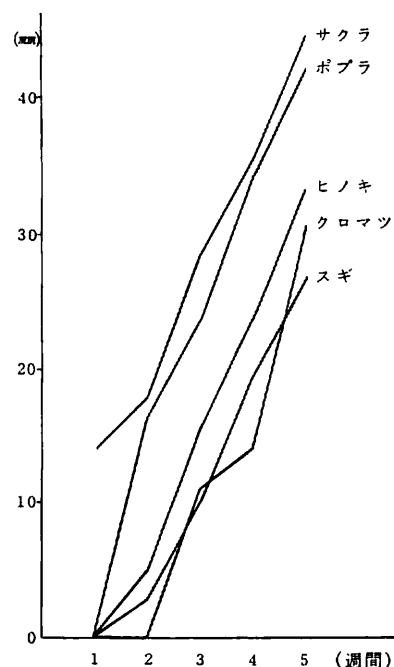


図1 鋸屑培地における菌糸の生育

Ⅷ 昆 虫

1 スギ採種穂園の虫害調査

新 田 肇

Ⅰ 目 的

スギ採種園及び採穂園における害虫の発生状況を調査し、園の保護管理上の資料とする。

Ⅱ 方 法

採種園のスギの一部155本及び採穂園のスギ119本について観察し、害虫による被害の多少を判定した。調査部位は葉及び枝とした。判定の基準は以下のとおりである。

判定基準

- ±……………1頭でも虫の寄生が認められるか、あるいは1箇所でも被害のこん跡がある。
- 十……………樹木の一部に虫が20～30頭まとまっているか、点在している。あるいは被害のこん跡が10箇所前後認められる。
- ++……………樹冠の10～50%に虫の寄生や被害跡が認められる。
- +++……………樹冠の大部分に虫が寄生しているか、被害跡が認められる。

調査は昭和57年10月に行った。採種園、採穂園ともに昭和57年7月にマラソン乳剤の1000倍液の散布を行っている。

Ⅲ 結 果

採種園及び採穂園の害虫の発生状況は、表1、表2のとおりであった。1本の木に2、3種の虫が認められる例が多いため、被害本数は重複して記してある。

前年度と同じように吸汁性の害虫が目立ったが、発生量は減少した。スギノハダニは採種園にくらべ採穂園でいく分多く発生した。

表1 採穂園の害虫発生状況

害 虫 名	判 定 区 分				
	±	十	++	+++	なし
スギノハダニ	56	35	4	0	60
スギクロホシカイガラムシ	74	19	5	4	53
スギマルカイガラムシ	22	7	0	0	126

表2 採種園の害虫発生状況

害 虫 名	判 定 区 分				
	±	十	++	+++	なし
スギノハダニ	17	45	33	21	3
スギクロホシカイガラムシ	48	13	3	2	53
スギマルカイガラムシ	7	3	0	0	109

IX 海岸緑化

1 湘南海岸地域における樹木育成に関する研究 —飛砂の垂直分布調査—

鈴木 清

I 目的

砂丘背後における飛砂の垂直的な分布を明らかにし、海岸砂防林保護管理の資料とする。

II 方法

1. 場所 平塚市袖が浜海岸
2. 器具 口径20cmの首振り式飛砂捕捉器（昭和51年度業務報告No.9参照）を使用した。
3. 器具高 飛砂捕捉器の地上高は、A 3.85m、B 5.59m、C 7.42m、D 4.06mで、図1のように設置した。
4. 期間 測定期間は、1回目が10月8日～12月24日、2回目が12月24日～2月1日、3回目が2月1日～3月31日の間である。

III 結果

3回の調査期間のうち、最も飛砂の多かったのは第1回目であった。このときAの位置では、1,601gの捕捉飛砂があった。第1回目における飛砂の垂直分は図1のようであり、高さ3mの防風ネットの上をかなりの砂が飛び越えていることがみとめられた。なおAの位置での飛砂量は第2回目が6.2g、第3回目が21.7gで、第1回目よりかなり少ない量であった。各期間の飛砂量は、風の強さとも関係がみられるが、前面の砂丘の堆砂状況と深い関係があるようである。

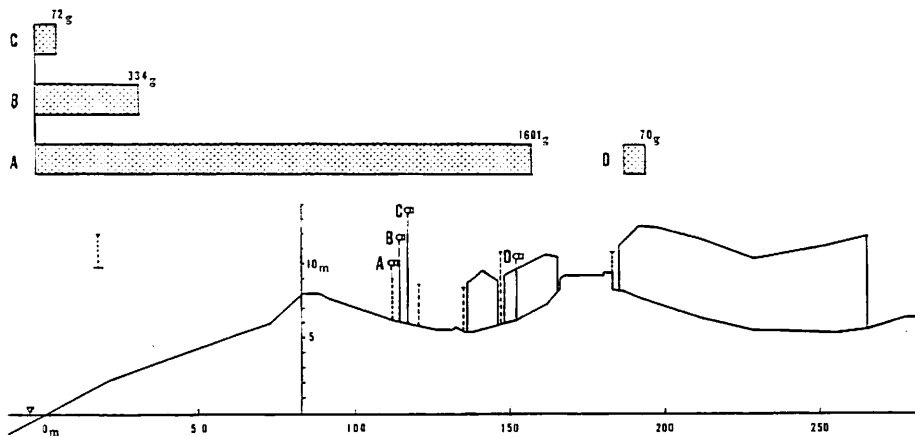


図1 高さ別捕捉飛砂量

X 山 地 緑 化

1 法面緑化に関する試験

中川 重年・鈴木 清

I 目 的

災害の防止、自然景観の保持などの観点から、開発行為による法面などの早期緑化が望まれている。そこで環境に応じた植生の再現をねらいとする緑化工法を解明する。

A コンクリート吹付斜面

I ねらい コンクリート吹付斜面をツタを用いて緑化を行う。

II 場 所 山北町三保地内野嵐、藤小屋（昭和52年度植栽）

III 方 法 $0.2 \times 0.5 \times 0.6m$ のコンクリートポットにナツツタ2年生を各4本植栽。
昭和56年度野嵐地区の1～2、3～4段に各1基つつ減光、防風用に幅2m、長さ10mのネットを設置。

IV 結 果 1. 被覆量 各地区の平均被覆量は表1のとおりである。
2. ネットの効果 現在効果を測定中である。

表1 ナツツタ平均被覆量

地区名	段名	平均被覆量
野 嵐	N 4	2.38 m^2
	N 3	4.43
	N 1	4.93
藤小屋	F 6	2.88 m^2
	F 4	5.88
	F 2	3.78

B 山砂利採取跡地

I ねらい 郷土樹種と、肥料効果のある樹種を選び、早期森林化、立地安定化をはかる。

II 場 所 中井町遠藤（昭和53年度）

III 方 法 軟質砂岩の地山部と盛土部にヤシャブシ、オオバヤシャブシ、ヤマハンノキを植栽。一部にアラカシを直接播種した。

IV 結 果 1. 地山部および盛土部における各樹種の樹高ならびに前年比伸長量は表2のとおり。

表2 地山部および盛土部における成長

2. アラカシの樹高は103.5cm、前年比伸長量は17.8cmであった。

区 分	樹 種	樹 高	前年比伸長量
地山部	ヤ シャ ブ シ	460 cm	165 cm
	オオバヤシャブシ	357	-40先端枯死
	ヤマハンノキ	463	43
盛土部	ヤ シャ ブ シ	343 cm	31 cm
	オオバヤシャブシ	306	-62先端枯死
	ヤマハンノキ	454	109

C 山砂利採取跡地

- I ねらい 郷土樹種を導入し自然林の造成をはかる場合には苗木の活着および苗木の入手難に問題があると考えられる。さらにクヌギ、アラカシは直根性で移植困難とされている。そこでクヌギ、アラカシ、ケヤキ、クマノミズキを用いて移植後の活着、生長不良を克服する技法について検討する。
- II 場所 山北町川西（昭和54年度）
- III 方法 ケヤキ、クヌギ、クマノミズキ、アラカシ30cm植木鉢仕立3年生苗を使用。30cm客土を行った犬走りに植栽。
- IV 結果 各樹種の樹高および前年比伸長量は表3のとおりである。

表3 各樹種の樹高および前年比伸長量

樹 種	本数	樹 高	前年比伸長量
ケ ヤ キ	4 ^本	214.3 ^{cm}	8.0 ^{cm}
ク ヌ ギ	8	153.4	25.1
クマノミズキ	3	208.3	55.0
ア ラ カ シ	11	155.6	35.5

D 山砂利採取跡地

- I ねらい 客土層の厚さのちがいが成長におよぼす影響を調べる。郷土樹種の[・][・][・][・]の巣まき掘取法による自然林造成を目指す。
- II 場所 城山町葉山島
- III 方法 直播き2年生のコナラ、クヌギ苗木および4年生アラカシ（根切りをしていない）を苗畑から掘り取り、根まきを行った上で植栽する。試験区は1区13×4mで客土層の厚さを0、0.3、0.5、1.0mの4区に分けた。
- IV 結果 各区における成長量は以下のとおりである。

表4 各区における樹高および前年比伸長量

樹 種	1区(0m)	2区(0.3m)	3区(0.5m)	4区(1.0m)
	樹高 伸長量	樹高 伸長量	樹高 伸長量	樹高 伸長量
コナラ(摘葉)	120.3 ^{cm}	129.5 ^{cm}	113.7 ^{cm}	119.2 ^{cm}
(無処理)	142.5	135.8	108.7	114.5
クヌギ	116.8	131.8	155.9	170.3
アラカシ(摘葉、枝)	110.0	150.0	—	195.0
(無処理)	201.0	151.0	235.0	167.0

XI 環 境 評 価

1 自生植物および帰化植物による評価（共同研究）

中 川 重 年

I 目 的

陸上植物を指標として環境の状態を正確に、容易に把握しうるような手法を開発する。

なおこの研究は自然環境の生物学的評価に関する研究として博物館と共同研究を行ったものである。

II 方 法

1. 場 所 県央地区から3ヶ所調査場所を選定。
2. 調 査 調査地内に自生する維管束植物をリストアップし自生植物と帰化植物（導入植物、逸出植物を含む）とに分け検討を行った。

III 結 果

3. 各調査地の値は表1のとおりである。

表1 調査地および出現種数、自生種、帰化植物種数

調 査 区	出現種数	自 生 種	帰化植物種数 *
厚 木 市 玉 川 地 区	7 3 3	5 6 7	1 6 6
愛 川 町 半 原 地 区	6 0 2	4 8 4	1 1 8
清川村礼掛・大洞地区	4 8 9	4 5 2	3 7

* 導入植物、逸出植物も含む

関 連 業 務

I 林 木 育 種 事 業

星山 豊房・新井 与一・小山 直次

1. 次代検定林の設定

検 定 林 名：関・神・8号次代検定林（スギ）

所 在 地：津久井郡相模湖町寸沢嵐 相模湖町県行造林1林班地内

面 積：1 ha

設定年月日：昭和57年5月26日

クローン数：51クローン

実生系統数：39系統（母親系）

植 栽 数：2,945本（植栽調査時点）

植 栽 方 法：不定本数混植（ブロック数5）

なお、既設次代検定林に導入できなかったか又は本数の少ないクローンについても積極的に導入を図り、県下の全次代検定林をひとまとめにして全クローン検定できる様努力している。

2. 次代検定林の調査

関・神・8号（スギ）の初年度調査と、関・神・5号（スギ）の5年目調査を実施した。

1) 関・神・8号次代検定林（スギ）

当該検定林は相模湖町の南端に位置し、標高300～370mで山ひだの北面である。局所的には検定地（Ⅰ～Ⅳブロック図1）中央部が小尾根で突出している。平均斜度は27～28度だが部分的に40度を越すので、根曲りの発生に注目している。なお、現地はスギの再造林地である。

植栽位置に“住所番号”を付し、住所とクローン名を対応させた。調査は、昭和58年1月10日に、活着率と樹高について実施した。結果を表1で示す。

2) 関・神・5号次代検定林（スギ）

5年目調査を実施したところ、補植によるクローン名の変更もあり、現在整理中なので後日改めて報告する考えでいる。

3. 採種園等の維持管理

スギ・ヒノキ・アカマツ・クロマツの精英樹クローン等集植所、スギ採種園、スギ採穂園等

1.96haについて除草・病虫害防除・施肥等の維持管理を実施した。

4. 苗木養成

1) さし木・つぎ木およびその養成

スギのさし木：67クローン、12,000本

ヒノキのつぎ木：44クローン、2,500本

2) 播 種

スギ：51系統

ヒノキ：母親系統混合種子（つぎ台用）

3) 床替と養成

スギさし木苗：63クローン、4,200本

スギ実生苗：29母親系統、3,800本

〃（2回床替）：40母親系統、1,700本

ヒノキつぎ木苗：42クローン、2,000本

ヒノキ実生苗：つぎ台用、4,600本

クロマツつぎ木苗：15クローン、220本

クロマツ実生苗：640本

4) 山出し

スギさし木苗：51クローン、1,900本

スギ実生苗：47母親系統、1,300本

5. 種子生産

スギ採種園について、ジベレリン濃度50 ppm区と40 ppm区に分けて、それぞれ6月下旬と8月上旬に葉面散布した。

球果採種はすべて“手もぎ”し、種子を生産した。生産量は約10 kg、このうちの約4 kgは47母親系統についてほぼ等重量で配合できた。

6. スギ採種園・スギ採穂園の整枝せん定

採種園・採穂園の一部について、優良種子・穂の生産のために、断幹整枝せん定を実施した。

7. ヒノキ採穂木の管理

暫定的の採穂木440本について施肥等維持管理を実施した。

表 1 平均樹高と活着率

精 英 樹 ク ロ ー ン						実 生					
クローン	平均 樹高	活着率	クローン	平均 樹高	活着率	系統	平均 樹高	活着率	系統	平均 樹高	活着率
三 浦 1	41 ^{cm}	95 [%]	三 保 1	47 ^{cm}	86 [%]	三 浦 2	52 ^{cm}	82 [%]	丹 沢 4	49 ^{cm}	81 [%]
2	47	94	2	39	85	中 1	48	90	5	52	100
中 1	38	84	3	45	76	2	48	81	箱 根 2	48	85
2	47	83	4	48	91	3	51	91	3	59	94
3	53	83	丹 沢 2	41	90	4	53	88	4	55	89
4	48	90	4	43	91	5	50	72	久 野 1	51	89
5	42	84	5	39	91	8	54	83	2	57	94
6	40	100	6	49	95	9	59	97	片 浦 1	48	76
8	46	79	8	36	80	10	55	84	2	55	90
9	53	82	10	45	100	11	53	85	6	48	85
10		0	箱 根 1	51	92	12	48	78	与 瀬 1	53	86
12	36	100	2	38	65	13	45	97	3	40	50
13	36	50	3	45	84	足柄上 2	54	89			
足柄上 2	42	93	4	50	88	3	55	89			
3	49	91	久 野 1	50	89	4	52	84			
4	51	100	2	57	46	5	55	76			
5	32	25	片 浦 1	35	73	足柄下 1	48	89			
足柄下 2	40	100	2	29	83	2	47	100			
3	36	57	3	44	88	5	45	88			
5	42	100	5	40	86	6	46	69			
6	52	88	6	45	74	7	43	56			
7	44	88	与 瀬 1	38	91	8	50	83			
愛 甲 2	46	86	3	49	78	愛 甲 2	48	88			
3	53	78	4	40	87	3	50	93			
津久井 1	49	98				津久井 1	50	89			
2	59	87				三 保 2	47	100			
3	40	75				3	46	82			
			平 均	44 ^{cm}	86 [%]				平 均	50 ^{cm}	86 [%]

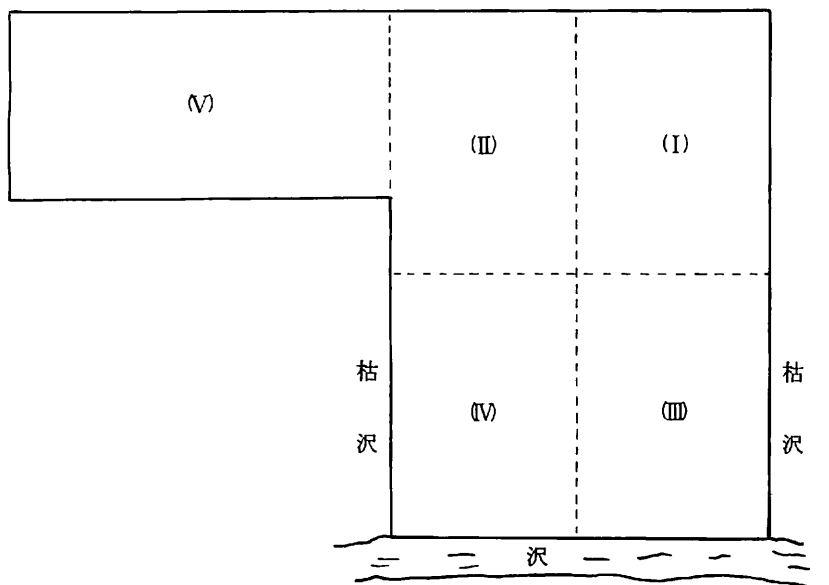


図 1 関・神・8号検定林区画図

Ⅱ 見本園管理事業

1 クリ園

七宮 清・中山 忠夫

Ⅰ 場 所 当场クリ見本園

Ⅱ 面 積 3,104 m^2 (旧クリ園 2,207.5 m^2 新植栽地 896.5 m^2)

Ⅲ 管 理

1. 月別作業

表1に示したとおりである。

表 1 クリ園の月別管理

年月 作業名	57年 4	5	6	7	8	9	10	11	12	58年 1	2	3	作 業 内 容
土じょう管理	○	○	○	○	○			○		○			耕耘(4、11月)、有機物投入(1月)、除草(機械刈5月、除草剤散布5、6、7、8月)
施 肥	○									○			化成肥料885号100kg(4月)、化成肥料42号140kg(1月)
秋 肥							○						礼肥として化成肥料180kg
病虫害防除		○											カミキリムシ防除のためトラセツト樹幹塗布
採 取					○	○							極早生種、早生種、中生種、晩生種の採取
せん定・整枝											○		枯枝等の整理

2. 特記事項

昭和55年5月下旬に根回しされ、11月下旬に成木移植されたクリ樹(6品種6本)の1本が、昭和58年2月22日に枯死したので伐倒した。

2 タケ・ササ

七宮 清・中山 忠夫

Ⅰ 場 所 当场タケ・ササ見本園

Ⅱ 面 積 2,808 m^2

Ⅲ 管 理

1. 月別管理

表1に示したとおりである。

表1 タケ・ササ見本園の月別管理

竹種	作業名	年 月												作 業 内 容		
		57年 4	5	6	7	8	9	10	11	12	58年 1	2	3			
タケ	除 草	○			○									ポット内および園路等の手取り除草		
	病虫害防除		○											スス病、カイガラムシ防除のためダイシストンおよびスミチオン散布		
	枯竹整理							○						桿数の整理		
ササ	除 草	○	○		○	○								除草剤(トレファノサイド、グラモキシオン、ニップetc.)によるポット内外の除草		

2. 特記事項

- (1) 昭和57年3月31日に植栽した実生モウソウチクのポット苗は1鉢枯死したが、残り8鉢のその後の生育は良好である。
- (2) ササ更新のため、昭和54年12月上旬にポット面積の1/2のササを掘りとったが、生育は順調に進み、ほぼ全面を覆うまで更新した。

IV 展示品種

昭和58年3月現在、タケ・ササ見本園の展示品種は表2に示したとおりである。なお、表中属の配列は、鈴木貞雄；日本タケ科植物総目録、学習研究社(1982)、和名は、神奈川県林業試験場；樹木園の木—林業試験場解説シリーズNo.1—(1983)によった。

表2 現存竹種一覧

属	種	属	種
マダケ	ホテイチク・フィリホテイチク(シマホテイチク)、マダケ、カタシボ、ヒメハチク、ケイチク(タイワンマダケ)、ゴマダケ、メグロチク、ハチク、クロチク、ウンモンチク、モウソウチク、ギンメイハチク、キッコウチク、キンメイモウソウチク、インヨウチク	ササ	ウンゼンザサ、ネマガリダケ、ミヤコザサ、サトチマキザサ、ヤネフキザサ、クマザサ
		アズマザサ	ミタケザサ(ミタケシノ)、フィリシイヤザサ(シロスジシイヤ)、ヒメスズタケ(ヤマキタダケ)、スエコザサ、トウゲダケ、ハコネメダケ
ナリヒラダケ	ナリヒラダケ、アオナリヒラ、リクチュウダケ、ホテイナリヒラ、ビゼンナリヒラ(ビロードナリヒラ)、ヤシヤダケ(ヤシヤマダケ)、ニッコウナリヒラ	スズタケ	スズタケ、スズザサ
		ヤダケ	ヤダケ、ラッキョウヤダケ(ラッキョウダケ)
トウチク	トウチク、スズコナリヒラ	メダケ	アケボノザサ、ボウシュウネザサ、フィリイヨスダレ、アズマネザサ、ヒメシマダケ、イヨスダレ、ハコネダケ、チゴザサ(シマダケ)、ダイミンチク、カンザンチク、リュウキュウチク、オロシマチク、メダケ、ハガワリメダケ、カムロザサ、オウゴンカムロザサ
カンチク	カンチク		
シホウチク	シホウチク		
オカメザサ	オカメザサ		
ホウライチク	ホウライチク、コマチダケ、フィリホウオウチク、ホウシヨウチク		

注) オウゴンホテイ、ミヤマホテイチク、フィリスズ、フィリネザサは学名不明のため未掲載(検討中)

3 モウソウチク

七宮 清・中山 忠夫

I 場 所 当场モウソウチク林

II 面 積 255 m^2

III 管 理

1. 立竹状況

昭和57年7月28日にモウソウチク林の栽培経営に資するため、昭和57年度に引続き立竹調査を行った。その結果は表1に示したとおりである。

表1 モウソウチク林の立竹状況

項目 \ 年	52	53	54	55	56	57	計
本 数(本) (%)	1	8	34	57	71	52	223 (100)
目通り直径の幅	9.6	8.0~11.6	7.0~17.6	6.6~12.4	6.4~11.4	3.6~12.4	3.6~17.6
平均目通り直径 (cm)	9.6	9.4	9.2	9.3	8.6	8.8	8.9

2. 月別管理

表2に示したとおりである。

表2 モウソウチク林の月別管理

作業名 \ 年月	57年 4	5	6	7	8	9	10	11	12	58年 1	2	3	作 業 内 容
土じょう管理			○							○			パーク堆肥、落葉堆肥のマルチング
伐竹整理			○				○						竹林内の整理(6月)、古竹の伐竹による桿数整理(10月)
たけのこ採取	○												モウソウタケノコの掘取り

4 街 路 樹

平野内定一・中山 忠夫

I 場 所 当场街路樹見本園

II 面 積 1,000 m^2

III 管 理

表1に示したとおりである。

IV 展示樹種

22科 33樹種 98本

表1 街路樹見本園の月別管理

作業名 \ 年月	57年 4	5	6	7	8	9	10	11	12	58年 1	2	3	作 業 内 容
除 草	○		○	○									園内除草(4、6月)、除草剤散布(4、6、7月)トレファノサイド、グラモキソンなど
整枝・せん定											○		樹姿を整える

5 生 垣

平野内定一・古根村 功

I 場 所 当场生垣見本園

II 面 積 400㎡

III 管 理

表1に示したとおりである。

表1 生垣見本園の月別管理

作業名 \ 年月	57年 4	5	6	7	8	9	10	11	12	58年 1	2	3	作 業 内 容
除 草					○			○					手取り除草(8月2回、11月)
施 肥											○		元肥として牛糞、化成肥料をそれぞれ施肥
病虫害防除		○											アブラムシ防除のためマラソン乳剤1,000倍液2回散布
刈 込 み			○			○							樹型を整えるため、両側面上面の刈込み

IV 展示樹種

34樹種 63列条

6 樹 木

平野内定一・中川 重年・中山 忠夫・古根村 功・数田 俊雄

I 場 所 当场各種樹木見本園

II 面 積 21,720㎡

III 管 理

それぞれ見本園の目的にそうように管理を行った。なお、すべての見本園に共通な管理として施肥、除草、病虫害防除等を実施した。

IV 見本園の種類と配置

表1、図1に示したとおりである。

表1 見本園の名称と展示樹種

番号	見本園の名称	樹種	本数
		種	本
1	針葉樹園	34	125
2	郷土の樹木園	118	199
3	ツバキ・サクラ見本園	182	509
4	広葉樹園	16	91
5	針葉樹園	66	184
7	野生花木園	37	197
8	薬用樹木見本園	18	105
9	自然林樹木園	15	168
12	カエデ科園	24	33
15	庭園(東面)	33	892
15-1	" (西面)	3	37
16	" (南面)	28	191
21	" (北面)	8	91

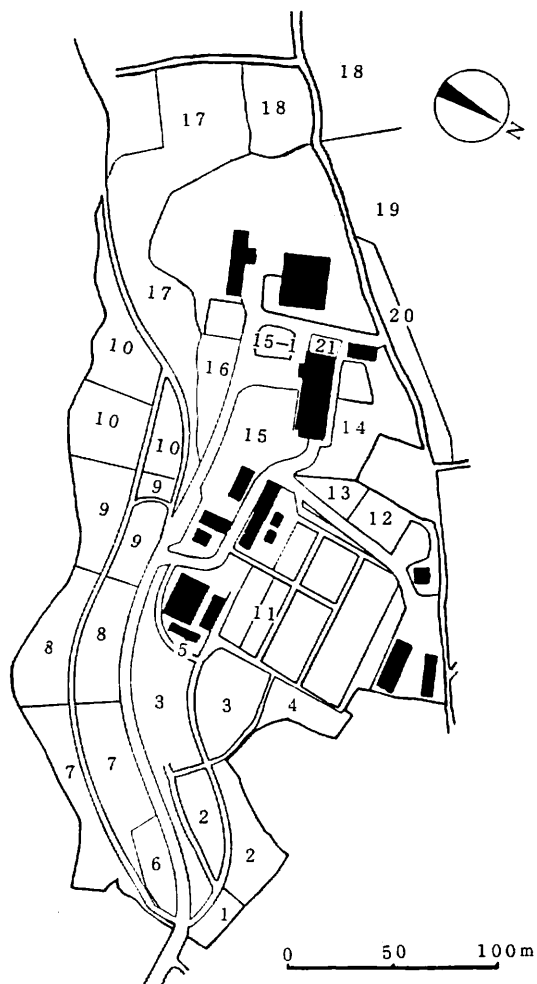


図1 見本園配置図

普 及 指 導 業 務

I 林業普及指導業務

普及指導課が主体となり林業改良指導員（Ａｇ）に対する研修や巡回指導を実施した。また、一般市民からの林業相談や施設案内をはじめ、林業後継者の育成や林業技術の普及をはかるための各種事業を実施した。

I 林業改良指導員に対する研修と巡回指導

1. 研 修

専門項目	実施年月日	場 所	講 師	内 容
④森林保護	57. 5. 24	当 場	新 田 肇 大 野 啓一朗	農薬について
林業経営	57. 6. 22	横 浜 市 港 北 区 日栄住宅資材K K 横 浜 市 場	日栄住宅資材K K横浜市 場長 山 本 嘉 朗 宏 寺 沢	木材の需給について
④木材加工	57. 7. 27	南 足 柄 市 内 山 木材工芸センター	工芸指導所加工技術科長 花崎 孝男ほか 中 川 重 年	木材工芸用機械の取扱いについて
造 林	57. 8. 19	厚 木 市 下 荻 野	寺 沢 宏 平野内 定 一	は種床の管理について
特殊林産	57. 9. 21	小 田 原 市 酒 匂 小田原市公設青果 地 方 卸 売 市 場	小田原市公設青果地方卸 売市場 管理事務所長 吉 本 寿 夫 清 七 宮	特用林産物、とくにキノコ類の流通 について
④林業機械	57. 11. 18	当 場	平野内 定 一	道具類の整備と活用について
普及方法	57. 12. 2	当 場	寺 沢 宏 中央研修受講者	指導計画と中央研修の伝達について

注) ④：特別研修の略 中央研修：国等が主催する研修

2. 巡回指導

林業経営 20件 造 林 29件 森林保護 1件 木材加工 2件
特殊林産 58件 林業機械 1件 普及方法 12件

II 林業相談並びに案内業務

1. 林業相談

林業経営 1件 造 林 16件 森林保護 25件 特殊林産 17件

2. 場内施設見学

見学者 1,868名（一般：318名 学校関係：1,550名）

Ⅲ 林業普及指導の各種事業

1. 交流学习推進事業

農山村の林業後継者（林業研究グループ）等の育成をはかるため、技術交換会並びに林業研究グループ・リーダー研修会を実施した。

1) 造林にかかわる技術交換会

実施年月日 昭和58年3月8日

場 所 小田原市本町ほか（県工芸指導所、いこいの森）
箱根町畑宿（寄木会館）

内 容 広葉樹材の利用について
森林の総合利用について

参加人員 36名

2) 特殊林産にかかわる技術交換会

実施年月日 昭和57年9月14日

場 所 川崎市高津区梶ヶ谷

内 容 しいたけ、なめこ、ひらたけ栽培について

参加人員 30名

3) グループ・リーダー研修会

実施年月日 昭和58年3月25日

場 所 厚木市旭町（グリーン会館）

内 容 特用林産物需給の現状と将来
一きのこ、くり、たけ、きり、うるしなどー

講 師 全国特用林産振興会 専務理事 村山善一

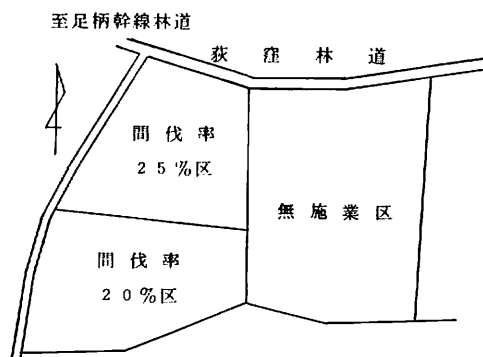
参加人員 24名

2. 林業技術現地適応化促進事業

課 題 西湘地方における間伐施業改善

目 的 伐期令40年、立木密度1ha当り1,000本、素材収穫量300m³、を目標とし、
間伐率(20%と25%)と間伐間隔(4年と6年)の比較展示をする。

実施場所 小田原市荻窪字古金山1970ほか



面 積 1ha
林 況 スギ・ヒノキ 22年生
施業状況

(10アール当り)

区 分		今回の間伐率	25%	20%	0% 無施業区
計	植 付 本 数		317	321	315
	既 伐 採 本 数		73	65	93
	作業前の立木本数		244	256	222
	伐 採 本 数		62	52	0
	残 存 本 数		182	204	222
内 ス ギ	植 付 本 数		167	153	304
	既 伐 採 本 数		30	29	91
	作業前の立木本数		137	124	213
	伐 採 本 数		40	31	0
	残 存 本 数		97	93	213
訳 ノ キ	植 付 本 数		150	168	11
	既 伐 採 本 数		43	36	2
	作業前の立木本数		107	132	9
	伐 採 本 数		22	21	0
	残 存 本 数		85	111	9
次回の間伐林令			28	26	—

3. 技術課題実証事業

(1) 課題名

木質系有機物を利用したハタケシメジの人工栽培

(2) 実施場所

伊勢原市沼目547 ほか2箇所

(3) 目的

きのこ栽培農家の所得向上と経営の安定を図るため新たにハタケシメジを導入し、菌床栽培の使用済培地等の木質系有機物を再利用しながら効率的栽培法を確立し、またこれに要する経費・労力等について実証する。

(4) 栽培方法

ビン栽培と袋栽培により実施した。なお、1箇所当りの調査区は表1のとおりである。

表1 調査区

栽培法	添加物の混合比	数量	備考
A ビン栽培	① 生の米ぬか 5%	80 ^{ビン}	混合は重量比
	② " 10%	80	"
	③ オートミール 5%	40	"
B 袋栽培	① 生の米ぬか 5%	80 ^袋	混合は重量比
	② " 10%	80	"
	③ オートミール 5%	40	"

注) 調査区の表示は A-①, ……とする

(5) 収めた成果

ア. 培養基材と容器 培養基材は2～3年野積したナメコ・ヒラタケの広葉樹のこ屑の残渣が最適であるが、今回使用したヒラタケの針葉樹のこ屑残渣も十分使用できる。また、容器はビンでも袋でもよいが、作業性、菌糸の生育速度の面からビンの方がよい。とくに、ヒラタケ栽培用PP製広口ビンが使用できれば、省力化の面で最適である。

イ. 栄養剤の種類と添加率 ビン、袋とも発生量の順位は、米ぬか10%＞米ぬか5%＞オートミール5%であった。また、米ぬかの場合菌糸の生育は5%＞10%であったが、発生量は10%＞5%であった。総体的に考えると、米ぬかは栄養剤として適当であり、添加率は10～20%である。

ウ. 菌かきの効果 菌かきは培養後2～3箇月目に行う方がよい。あまり遅いと菌糸の再生に時間がかかる。また菌かき後培養基は、すみやかに17～20℃の発生室に移した方がよい。これは培養基の乾燥防止を図るためである。

エ. 滅菌 滅菌がまはボイラー式より直火式の方が効果がある。

オ. 接種量 ビン栽培の場合、培養基1,000CC当り20～30CCが適当である。袋は30～50CCである。

一 般 業 務

I 概 要

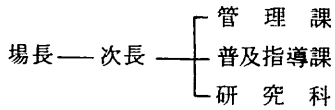
1. 沿革

昭和43年厚木市七沢に林業試験場を設置、林業の試験研究機関として発足する。

2. 所在地

厚木市七沢657

3. 組織



4. 土地

所 在 地	用 途	面 積 (㎡)	価 格 (千円)	取 得 年 月 (管理換年月日)
厚木市七沢日向原657	試験場等用地	5 5,9 4 0.0 4	7 5,6 9 1	昭和42. 3 (昭和44.1 2.2 7)
厚木市七沢日向原622	林木育種用地	1 4,5 4 9.0 0	1 4,5 5 1	昭和46.1 2 (昭和47. 2. 9)
秦野市東田原字船久保 495の1	林木育種用地	3,4 9 2.0 0	1 7,6 5 6	昭和39. 2 (昭和47. 4. 1)
計		7 3,9 8 1.0 4	1 0 7,8 9 8	

Ⅱ 職 員 配 置 表

昭和58年3月31日現在

課 (科) 名	職 名	氏 名	備 考
	場 長 次 長	大 島 照 治 荻 野 岩 雄	
管 理 課	課長(兼)係長 主 任 主 事 主 事	石 川 金 一 高 橋 ア ヤ 子 岩 崎 信 弘	
普 及 指 導 課	課 長 副 技 幹 副 技 幹 技 能 技 師 技 能 技 師	寺 沢 宏 平 野 内 定 一 七 宮 清 中 山 忠 夫 古 根 村 功	
研 究 科	科 長 専 門 研 究 員 専 門 研 究 員 主 任 研 究 員 主 任 研 究 員 主 任 研 究 員 技 師 技 師 技 能 技 師 技 能 技 師 技 能 技 師	新 田 肇 大 野 啓 一 朗 鈴 木 清 星 山 豊 房 越 地 正 赤 岩 興 一 中 川 重 年 木 内 信 行 小 田 川 行 雄 新 井 与 一 小 山 直 次	担当 保護部門 " 造林及環境緑化部門 造林部門 造林及環境緑化部門 造林部門 造林及環境緑化部門 特産部門

昭和57年度中の職員の異動

転 出	昭和57年4月1日	主任主事	岸 田 寿 昭	(県央地区行政センターへ)
"	昭和57年6月1日	場 長	角 田 賢 造	(農政部農政総務室へ)
"	昭和57年6月1日	次 長	森 有 功	(環境部環境総務室へ)
転 入	昭和57年4月1日	主 事	岩 崎 信 弘	(新 採 用)
"	昭和57年6月1日	場 長	大 島 照 治	(農政部林務課から)
"	昭和57年6月1日	次 長	荻 野 岩 雄	(県央地区行政センターから)

Ⅲ 予算及び決算

1. 歳入

(単位 円)

科 目	予 算	決 算	備 考
(款) 使用料及び手数料	8,980	8,980	
(項) 使 用 料	8,980	8,980	
(目) 農林水産業使用料	8,980	8,980	
(款) 財 産 入	76,240	76,240	
(項) 財 産 売 払 収 入	76,240	76,240	
(目) 物 品 売 払 収 入	6,040	6,040	
(目) 生産物売払収入	70,200	70,200	
(款) 諸 収 入	468	468	
(項) 預 金 利 子	318	318	
(目) 預 金 利 子	318	318	
(項) 立 替 収 入	150	150	
(目) 農林水産業立替収入	150	150	
合 計	85,688	85,688	

2. 歳出

(単位 円)

科 目	予 算	決 算	備 考
(款) 総 務 費	10,342,081	10,342,081	
(項) 総 務 管 理 費	10,067,109	10,067,109	
(目) 一 般 管 理 費	9,947,109	9,947,109	
(節) 報 酬	7,040,249	7,040,249	
共 済 費	417,836	417,836	
旅 費	2,489,024	2,489,024	
(目) 財 産 管 理 費	120,000	120,000	

科 目	予 算	決 算	備 考
(節) 需 用 費	1 2 0,0 0 0	1 2 0,0 0 0	
(項) 涉 外 費	2 7 4,9 7 2	2 7 4,9 7 2	
(目) 国 際 交 流 費	2 7 4,9 7 2	2 7 4,9 7 2	
(節) 需 用 費	2 7 4,9 7 2	2 7 4,9 7 2	
(款) 県 民 環 境 費	2 6 6,0 0 0	2 6 6,0 0 0	
(項) 自 然 保 護 費	2 6 6,0 0 0	2 6 6,0 0 0	
(目) 自 然 保 護 推 進 費	2 6 6,0 0 0	2 6 6,0 0 0	
(節) 賃 金	2 0 9,0 0 0	2 0 9,0 0 0	
需 用 費	5 7,0 0 0	5 7,0 0 0	
(款) 農 林 水 産 業 費	3 0,5 5 8,5 3 8	3 0,5 5 8,5 3 8	
(項) 農 業 費	3 0 1,9 4 3	3 0 1,9 4 3	
(目) 農 業 総 務 費	2 9 0,0 0 0	2 9 0,0 0 0	
(節) 報 償 費	9 0,0 0 0	9 0,0 0 0	
需 用 費	1 7 0,0 0 0	1 7 0,0 0 0	
役 務 費	3 0,0 0 0	3 0,0 0 0	
(目) 農 業 構 造 改 善 対 策 費	9,9 4 3	9,9 4 3	
(節) 旅 費	9,9 4 3	9,9 4 3	
(目) 農 業 試 験 研 究 機 関 費	2,0 0 0	2,0 0 0	
(節) 報 償 費	2,0 0 0	2,0 0 0	
(項) 林 業 費	3 0,2 5 6,5 9 5	3 0,2 5 6,5 9 5	
(目) 林 業 総 務 費	1,5 3 9,0 0 0	1,5 3 9,0 0 0	
(節) 賃 金	1 0 0,0 0 0	1 0 0,0 0 0	
需 用 費	1,2 0 0,0 0 0	1,2 0 0,0 0 0	
使用料及び賃借料	3,0 0 0	3,0 0 0	
備 品 購 入 費	2 3 6,0 0 0	2 3 6,0 0 0	
(目) 林 業 振 興 指 導 費	2 3,2 5 0,8 2 6	2 3,2 5 0,8 2 6	
(節) 共 済 費	2 0,8 8 5	2 0,8 8 5	
賃 金	6,1 1 9,3 1 9	6,1 1 9,3 1 9	

科	目	予	算	決	算	備	考
	報 償 費	6 0,0 0 0		6 0,0 0 0			
	旅 費	8 8 3,9 6 4		8 8 3,9 6 4			
	需 用 費	1 0,8 8 5,0 0 0		1 0,8 8 5,0 0 0			
	役 務 費	1,8 4 9,4 1 8		1,8 4 9,4 1 8			
	委 託 料	9 4,9 0 0		9 4,9 0 0			
	使用料及び賃借料	4 0,0 0 0		4 0,0 0 0			
	工 事 請 負 費	6 0 0,0 0 0		6 0 0,0 0 0			
	備 品 購 入 費	2,6 2 4,3 4 0		2,6 2 4,3 4 0			
	負 担 金 補 助 金 及 び 交 付	7 3,0 0 0		7 3,0 0 0			
	(目) 造 林 費	1,2 2 0,0 0 0		1,2 2 0,0 0 0			
	(節) 需 用 費	1,2 2 0,0 0 0		1,2 2 0,0 0 0			
	(目) 林 道 費	1,1 5 9,8 1 1		1,1 5 9,8 1 1			
	(節) 賃 金	1 0 0,0 0 0		1 0 0,0 0 0			
	旅 費	4 9 9,8 1 1		4 9 9,8 1 1			
	需 用 費	5 5 0,0 0 0		5 5 0,0 0 0			
	使用料及び賃借料	1 0,0 0 0		1 0,0 0 0			
	(目) 治 山 費	3,0 8 6,9 5 8		3,0 8 6,9 5 8			
	(節) 賃 金	1 7 9,0 0 0		1 7 9,0 0 0			
	旅 費	9 0 2,9 8 0		9 0 2,9 8 0			
	需 用 費	2,0 0 4,9 7 8		2,0 0 4,9 7 8			
	(款) 林 業 改 善 資 金	3 9,8 5 5		3 9,8 5 5			
	(項) 事 務 費	3 9,8 5 5		3 9,8 5 5			
	(目) 貸 付 事 務 費	3 9,8 5 5		3 9,8 5 5			
	(節) 旅 費	2 9,8 5 5		2 9,8 5 5			
	需 用 費	1 0,0 0 0		1 0,0 0 0			
	合 計	4 1,2 0 6,4 7 4		4 1,2 0 6,4 7 4			

Ⅳ 主な行事一覧（管理・普及・研究）

年 月 日	事 項	場 所	摘 要
5 7. 4. 5	57年度当初予算及び主要事業説明会	県 庁	角田場長出席
" 4. 7	技術課題実証事業打合	平 塚 合 庁	七宮専技ほか出席
" 4.1 3	地区主任AG打合会	県 庁	寺沢課長ほか出席
" 4.1 6	全国林業普及職員協議会役員会	東 京	寺沢課長出席
" 4.1 6	県央地区行政総合調整会議	厚 木 合 庁	角田場長出席
" 4.2 2	5 6 年度定期監査	当 場	
" 4.2 6	農政部試験研究機関場所長会	畜 産 試 験 場	角田場長出席
" 4.2 8	全国林業普及職員協役員会	東 京	寺沢課長出席
" 4.2 8	県立伊勢原高校5 1 名見学	当 場	
" 5. 6	中国安徽省研修生研修開始	当 場	
" 5. 7	" カリキュラム打合	当 場	林試・県有林
" 5. 9	植樹祭	松 田 町	角田場長ほか出席
" 5.1 0	試験研究連絡協議会	県 庁	角田場長出席
" 5.1 1	林学会関東支部幹事会	東 京	"
" 5.1 2	県林業協会総会	グ リ ー ン 会 館	"
" 5.1 4	職員全体会議	当 場	
" 5.1 7	全国林試協役員会	東 京	角田場長出席
" 5.1 8	木材流通検討会	農 業 共 済 ビ ル	平野内副技幹出席
" 5.2 4	AG研修（森林保護）	当 場	新田科長ほか出講
" 5.2 5	全国普及職員協議会総会	東 京	寺沢課長出席
" 6. 7	山林種苗協同組合総会	箱 根 町	寺沢課長出席
" 6.1 1	林業協会キノコ部会	グ リ ー ン 会 館	七宮専技出講
" 6.1 7	技術連絡会議	農 総 研	新田科長出席
" 6.2 2	AG研修（林業経営）	横 浜 市	寺沢課長ほか出席
" 6.2 4	厚木市の緑を豊かにする審議会	厚 木 市 役 所	大島場長出席
" 7. 5	試験研究連絡協議会	県 庁	"
" 7. 7	農政部試験研究機関場所長会	淡水魚増殖試験場	"
" 7.1 3 ~1 4	関中林試連総会	愛 知 県	"
" 7.2 7	全国林試協役員会	東 京	"
" 7.2 7	AG研修（木材加工）	2 1 世 紀 の 森	平野内副技幹ほか出講

年 月 日	事 項	場 所	摘 要
5 7. 8. 2	試験研究連絡協議会	中 央 農 業 会 館	大島場長出席
" 8.1 2	試験研究推進協議会	当 場	
" 8.1 9	A G研修（造林）	厚 木 市	寺沢課長ほか出席
" 9. 1	防災訓練	当 場	
" 9. 1	試験研究連絡協議会（環境）	公 害 セ ン タ ー	越地主研出席
" 9. 3	有害鳥獣対策協議会	県 庁	新田科長出席
" 9. 7 ~ 9	林業グループ関東甲シンポジウム	青 梅 市	寺沢課長出席
" 9.1 3	技連会議	農 総 研	大野専研出席
" 9.1 3	川崎市内納税組合員25名見学	当 場	寺沢課長応接
" 9.1 4	交流学習現地交換会	川 崎 市	寺沢課長ほか出席
" 9.1 7	職員全体会議	当 場	
" 9.2 1	A G研修（特用林産）	小 田 原 市	七宮専技ほか出講
" 9.2 9	関中国公立林試研究協	東 京	新田科長出席
" 9.2 9 ~ 10.1	関中林試造林部会	福 島 県	鈴木専研、赤岩主研出席
" 9.3 0	関中ブロック協議会	東 京	新田科長出席
" 10. 6 ~ 7	関中林試連環境部会	山 梨 県	中川技師出席
" 10. 7	試験研究連絡協議会	中 央 農 業 会 館	大島場長出席
" 10. 7 ~ 9	関中林試連育種部会	岐 阜 県	星山主研ほか出席
" 10.1 4	出納検査（厚木出納職員）	当 場	
" 10.1 4 ~ 15	関中林試連保護部会	茨 城 県	大野専研出席
" 10.1 9	関甲信静ブロック特林振興打合	東 京 都 大 島	七宮専技出席
" 10.2 0	林学会関東支部総会	埼 玉 県	新田科長出席
" 10.2 0 ~ 21	林木育種推進地区協議会	山 梨 県	星山主研出席
" 10.2 7	農政部試験研究機関場所長会	畜 産 試 験 場	荻野次長出席
" 10.2 7 ~ 29	林業普及指導職員全国シンポジウム	東 京 都	七宮専技出席
" 11. 4	大磯町保護司会21名見学	当 場	平野内副技幹応接
" 11. 5	林構事業経営管理指導研修会	グ リ ー ン 会 館	" 出席
" 11. 9	大阪府農林部長来場	当 場	大島場長応接
" 11.1 0	平塚くらしの会50名見学	"	寺沢課長応接
" 11.1 0	全国林試協役員会	東 京	大島場長出席
" 11.1 3	58年度当初予算主任査定	県 庁	荻野次長ほか出席
" 11.1 5	試験研究連絡協議会	県 庁	新田科長出席
" 11.1 5	厚木市南毛利小200名見学	当 場	七宮専技応接
" 11.1 8	A G研修（林業機械）	当 場	平野内副技幹ほか出席

年 月 日	事 項	場 所	摘 要
5 7. ¹ / ₂ ^{1.2} / ₂ ⁴ / ₅	首都近郊都県場所長会	山 梨 県	大島場長出席
" 1 1.2 5	農政部場所長会議	平 塚 市	新田科長出席
" 1 1.2 9	県央地区行政総合調整会議	厚 木 合 庁	大島場長出席
" 1 2. 2	A G 研修 (普及方法)	当 場	寺沢課長ほか出講
" 1 2. 6	林業のつどい	逗 子 市	" 出席
" 1 2.1 8	林業協会竹産業部会	工 芸 指 導 所	七宮専技出講
" 1 2.2 5	少年工科学校 2 1 名見学	当 場	新田科長応接
5 8. 1.1 4	職員全体会議	当 場	
" 1.1 9	シイタケ栽培技術研修会	グ リ ー ン 会 館	七宮専技出講
" 1.2 0	試験研究連絡協議会	県 庁	新田科長出席
" 1.2 1	技術課題実証事業成果検討会	平 塚 合 庁	七宮専技ほか出席
" 1.2 5	県央地区緑のプロジェクト検討会	厚 木 合 庁	中川技師出席
" 1.2 6	種苗認定打合会	当 場	寺沢課長ほか出席
" ² / ₃ ³ / ₄	5 7 年度監査 (職員調査)	当 場	
" 2. 8	試験研究連絡協議会	中 央 農 業 会 館	大島場長出席
" 2.1 0	地区主任、A G 打合会	県 庁	寺沢課長ほか出席
" 2.2 2	5 7 年度監査	当 場	
" 2.2 5	厚木市七沢地区婦人学級	玉 川 公 民 館	中川技師出講
" 3. 9	現地適応化促進事業打合会	当 場	寺沢課長ほか出席
" 3.1 0	有害無獣対策協議会	中 央 農 業 会 館	新田科長出席
" 3.1 1	県造林公社業務推進会議	グ リ ー ン 会 館	寺沢課長出席
" ^{3.1} / ₄ ⁴ / ₅	林木育種担当者会議	水 戸 市	星山主研出席
" 3.1 4	地区主任、A G 打合会	県 庁	寺沢課長出席
" 3.1 4	日本植物友の会 2 1 名見学	当 場	新田科長応接
" 3.1 6	片瀬地区生活環境協議会 2 0 名見学	当 場	七宮専技応接
" 3.1 8	場内研修「生活と樹木」	当 場	東京農大伊藤邦衛講師
" 3.2 3	全国林試協役員会	東 京	大島場長出席
" 3.2 3	林業後継者育成推進会議	2 1 世 紀 の 森	寺沢課長ほか出席
" 3.2 4	全国林試協総会及びシンポジウム	東 京	大島場長ほか出席
" 3.2 5	林研グループリーダー研修会	グ リ ー ン 会 館	大島場長ほか出席
" 3.2 8	現地適応化促進事業検討会	小 田 原 市	寺沢課長ほか出席
" 3.3 1	中国安徽省研修生研修終了	当 場	

測 觀 象 氣

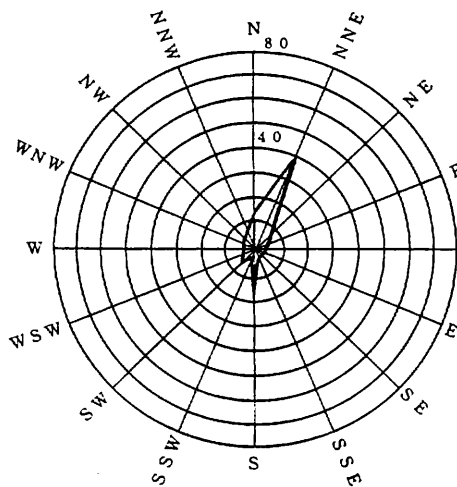
I 昭和57年気象観測集計表

神奈川県林業試験場（厚木市七沢657）

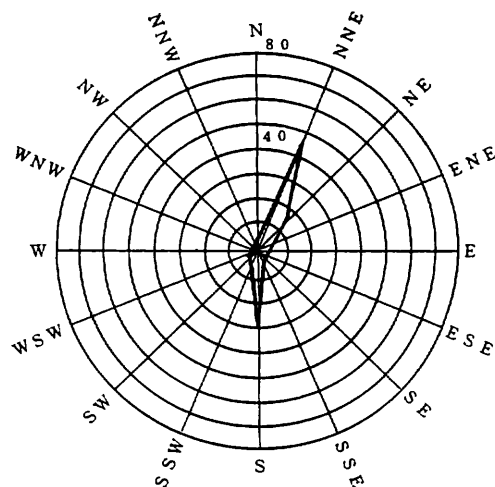
要 素		月別 旬別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年平均	
℃	最 高 (平均)	上 旬	10.1	7.1	11.5	15.8	23.9	24.0	24.0	27.8	25.8	20.2	17.5	14.5		
		中 旬	8.6	9.9	14.0	17.8	23.6	24.8	25.6	27.5	22.3	21.4	16.8	12.2		
		下 旬	9.6	9.4	14.4	18.1	24.7	22.8	24.8	29.7	24.1	20.3	14.7	11.7		
気	平 均		9.4	8.8	13.4	17.3	24.1	23.9	24.8	28.4	24.1	20.6	16.3	12.8	18.7	
		最 低 (平均)	上 旬	0.1	- 3.9	0.2	4.8	13.2	15.1	15.7	20.1	18.5	13.3	11.4	2.3	
			中 旬	- 1.1	0.6	3.6	4.6	12.2	15.0	17.7	20.2	15.7	12.6	9.8	2.1	
下 旬	- 3.3		0.0	3.1	9.1	12.6	14.6	19.0	21.2	16.0	9.1	4.5	1.7			
温	平 均		- 1.4	- 1.1	2.3	6.2	12.7	14.9	17.5	20.6	16.7	11.7	8.6	2.0	9.3	
		平 均	上 旬	5.1	1.6	5.9	10.3	18.6	19.6	19.9	24.0	22.2	16.8	14.5	8.4	
			中 旬	3.8	5.3	8.9	11.3	17.9	20.0	21.6	23.9	19.0	17.0	13.3	7.2	
下 旬	3.1		4.7	8.8	12.8	18.7	18.7	22.0	25.5	19.6	14.7	9.6	6.7			
月 平 均			4.0	3.9	7.9	11.4	18.4	19.4	21.2	24.5	20.3	16.2	12.5	7.4	14.0	
%	最 低 (平均)	上 旬	41.1	40.7	49.7	53.7	57.7	70.4	67.8	75.2	71.5	67.8	70.9	48.6		
		中 旬	44.2	50.3	49.3	43.5	57.5	60.6	74.9	77.4	70.6	61.5	66.0	54.5		
		下 旬	35.6	41.6	45.2	63.5	56.2	64.9	79.8	75.3	68.9	50.7	51.8	51.3		
湿	平 均		40.1	44.2	48.1	53.6	57.1	65.3	74.3	76.0	70.3	60.0	62.8	51.5	58.7	
		平 均	上 旬	65.0	67.5	72.6	73.2	76.8	83.6	82.3	87.0	85.2	82.4	83.5	72.7	
			中 旬	68.8	70.8	72.3	68.4	76.9	78.8	86.6	88.3	84.4	78.8	81.2	76.0	
下 旬	64.0		66.7	68.7	79.8	76.4	80.6	88.9	87.5	83.7	74.6	73.9	73.5			
月 平 均			65.9	68.3	71.2	73.8	76.7	81.0	86.0	87.6	84.4	78.6	79.4	74.1	77.3	
(mm)	降水量	上 旬	22.9	2.0	33.0	38.1	38.6	103.0	41.3	268.8	76.3	133.5	55.4	0.0	年降水量	
		中 旬	1.0	38.8	28.9	79.5	27.2	35.0	80.8	96.4	256.6	47.8	9.1	0.0		
		下 旬	0.0	20.1	39.6	38.7	10.6	40.2	83.4	96.9	65.4	0.0	0.0	29.9		
降	合 計		23.9	60.9	101.5	156.3	76.4	178.2	205.5	462.1	398.3	181.3	64.5	29.9	1,938.8	
	極 大	上旬 D H	16.2 3.0	2.0 2.0	15.4 6.3	15.5 3.0	18.7 6.2	80.8 17.2	38.3 8.4	148.6 34.3	15.1 8.9	48.6 7.2	21.5 5.4	0.0 0.0		
		中旬 D H	1.0 1.0	29.2 7.4	11.7 3.8	71.7 15.6	15.4 5.5	34.0 5.4	40.0 5.0	83.0 51.3	165.8 27.8	25.0 8.0	9.1 2.0	0.0 0.0		
下旬 D H		0.0 0.0	10.6 2.0	28.0 9.5	20.5 4.4	10.6 2.2	14.2 6.0	32.0 28.8	38.8 16.8	34.0 5.5	0.0 0.0	0.0 0.0	24.7 4.0			
m/sec	平均最大風速 (平均)	上 旬	2.8	1.8	3.4	2.2	3.5	3.9	1.1	4.3	2.6	4.5	0.6	2.3		
		中 旬	3.2	2.7	3.1	2.9	2.6	1.6	2.5	1.0	3.7	3.1	3.3	2.7		
		下 旬	3.0	3.8	3.3	1.6	0.9	4.8	1.4	1.4	4.3	1.1	3.9	3.7		
風	月 平 均		3.0	2.8	3.3	2.2	2.4	3.5	1.7	2.1	3.6	3.2	2.6	2.7	2.7	
		瞬間最大風速 (極直)	上 旬	13.8	10.4	22.3	17.6	16.9	19.7	9.0	32.0	14.8	21.9	10.3	11.4	
			中 旬	14.2	11.6	15.5	16.6	16.7	13.0	21.3	10.2	24.3	10.0	13.8	21.2	
下 旬	14.9		10.6	17.8	14.2	12.1	15.6	10.9	14.0	14.1	15.5	18.1	15.9			

注) 観測器は小笠原計器製作所製抵抗式自記温度計・毛髪式自記湿度計・転倒ます型雨量計、光進電気工業株式会社KD-110コーシンペーン A Type を使用した。なお、百葉箱は複式である。Dは1日当りの降水量、Hは1時間当りの降水量を示す。

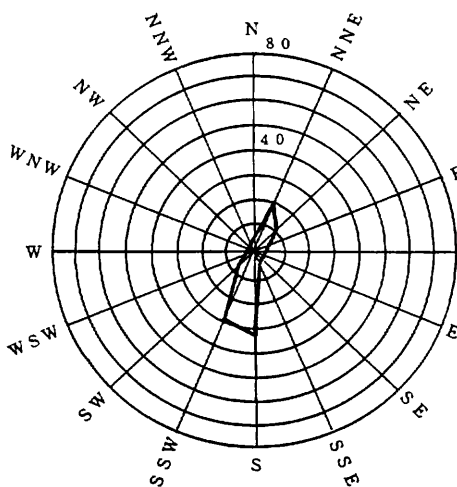
Ⅱ 昭和57年月別風向頻度図



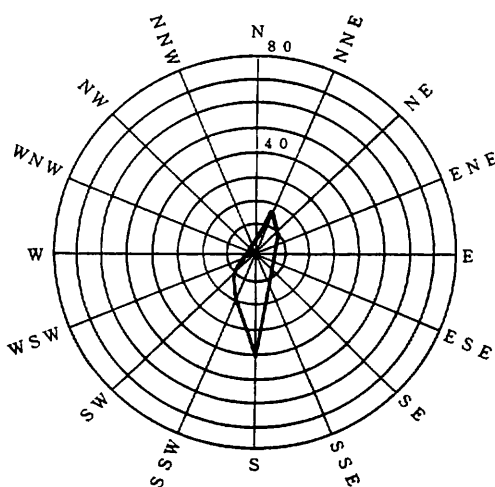
1月



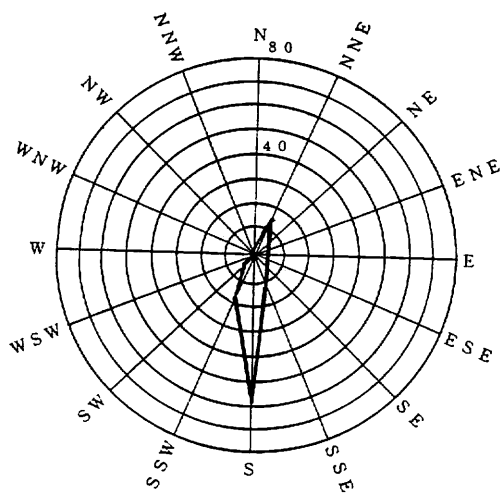
2月



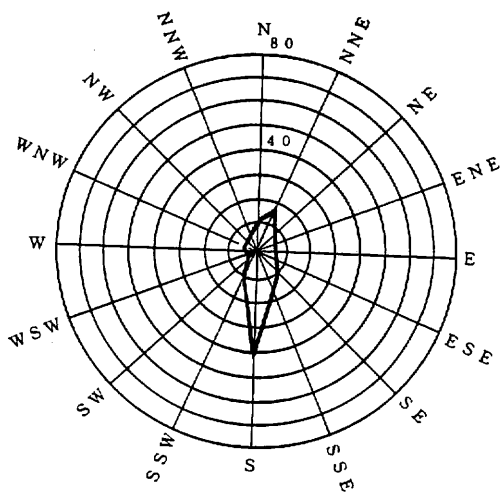
3月



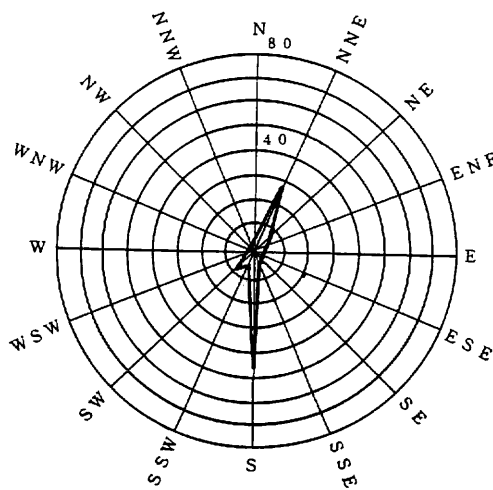
4月



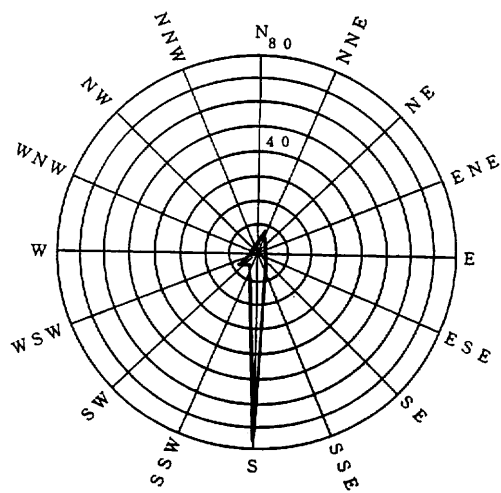
5月



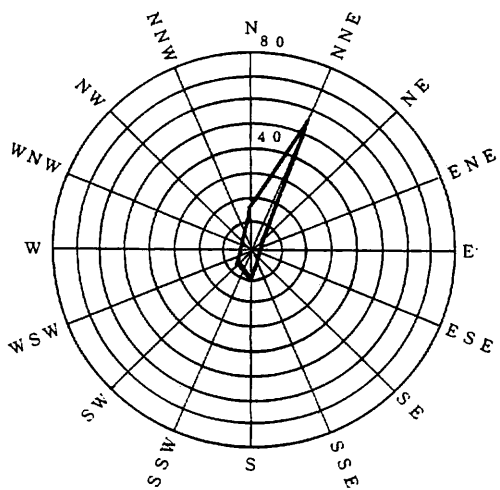
6月



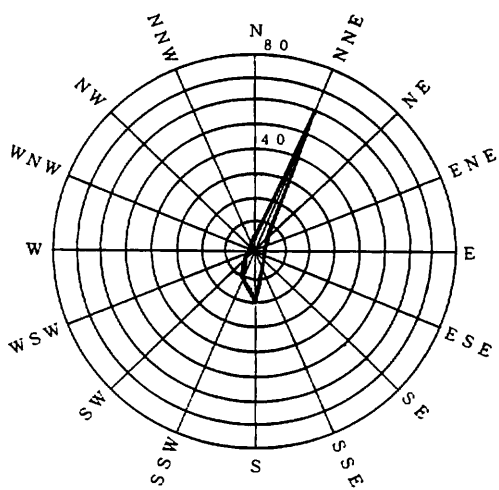
7月



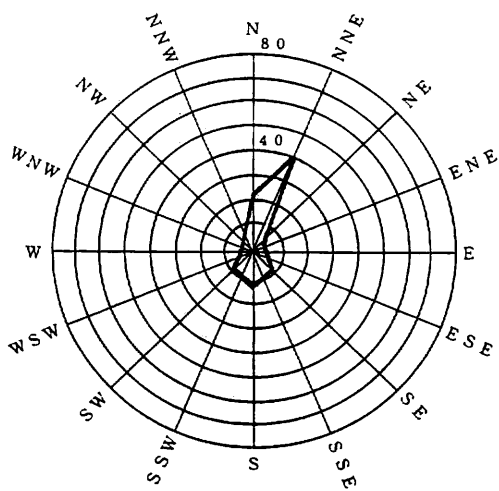
8月



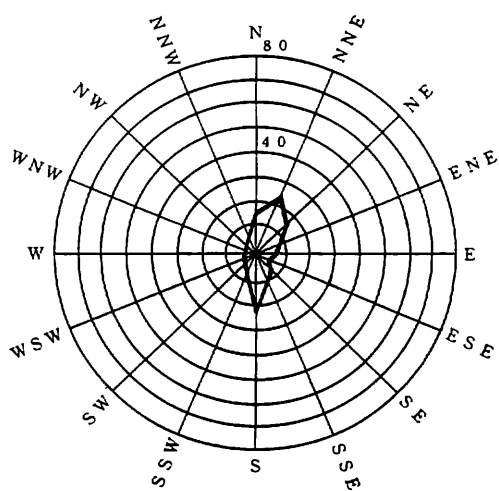
9月



10月



11月



12月

昭和 57 年 度

業 務 報 告

神 奈 川 県 林 業 試 験 場

神 奈 川 県 厚 木 市 七 沢 6 5 7 番 地

電 話 (0462)48-0321

郵便番号 2 4 3 - 0 1